

大学教育の質保証 ①

各種授業手法の活用状況・実態調査から

高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

高大接続・全学教育推進センターでは、授業改善のPDCAサイクルの一環として、授業別ループリックの作成とシラバスへの掲載、学生による授業アンケート、自己点検票の作成等を教員の皆さんにお願いしています。H28秋学期、H29春学期の自己点検票では、初の試みとして各科目でどのような授業手法が取られているか実態調査を実施しました。学びを深化、定着化させる手法としてアクティブ・ラーニングが注目されていますが、まずは現状を確認し、課題を抽出することが大学教育の内部質保証システムを実質化する第一歩と認識しています。新学期を前に、今後の授業設計の一助として調査結果の概要を紹介します。

学生に意見求める、練習問題させる、小テストするなどの手法が活用されている

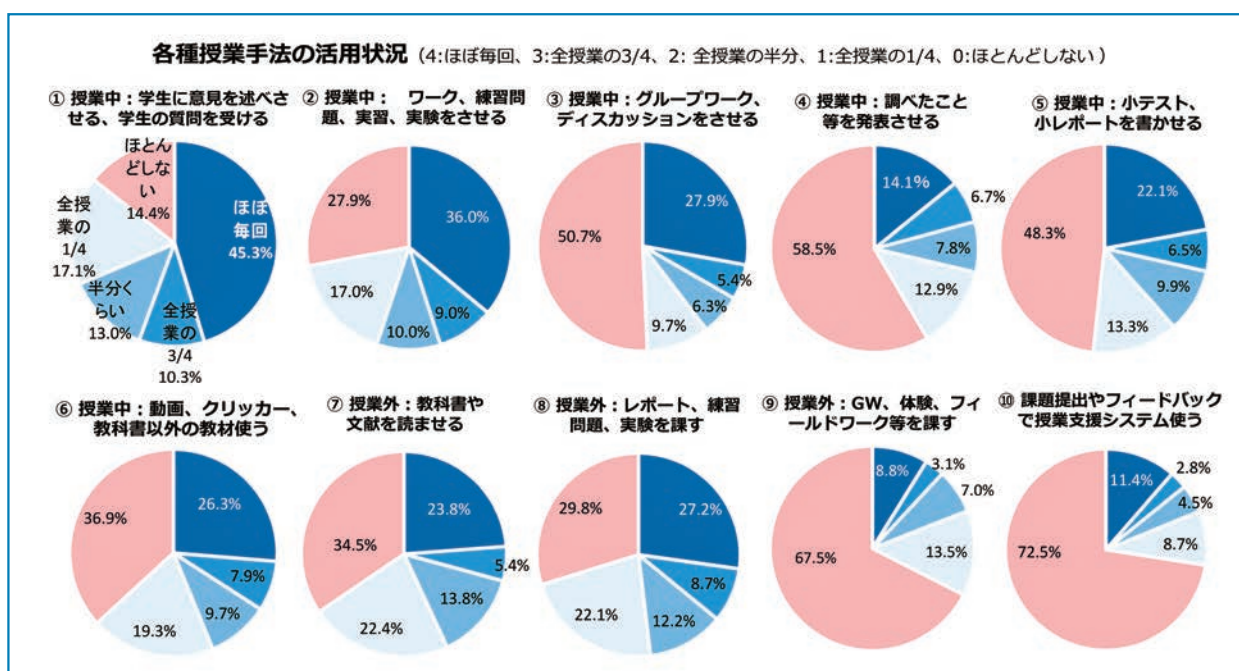
本調査では各種授業手法の活用状況を訊きました。回答者はH28秋、H29春の自己点検票で回答いただいた753

科目の教員で、全科目の約20%に当たります。

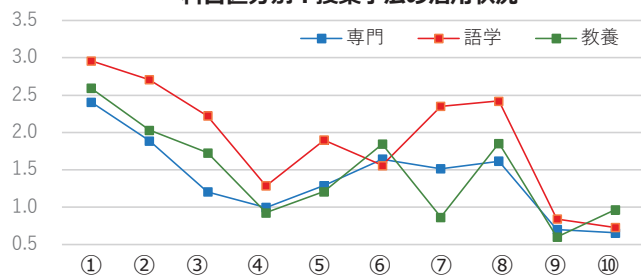
下の円グラフ①②⑤など、従来型の学生参加の授業手法は比較的多くの科目で実施されています。一方、③④など、アクティブ・ラーニング手法（以降、AL）を実施するのは半数またはそれ以下に留まっています。回答率は約20%であり、授業に熱心な教員の回答が多いと推測されるため、本学でAL手法を実施している科目の実態は本結果よりも下がるかもしれません。

科目種、クラス規模により各種授業手法の活用度に差がある

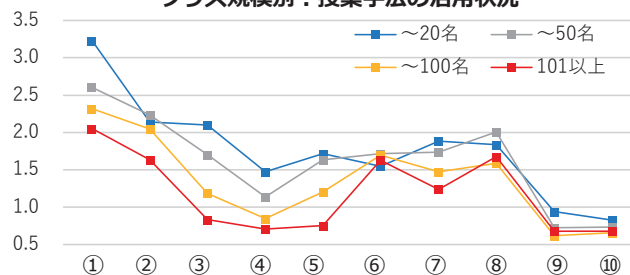
学修内容の性質から専門（学部教育）、教養（全学教育）、外国語の3種に分けて各設問の平均値を次頁に示します。外国語の授業工夫は全般的に活発で、特に⑦⑧の授業外の課題が高く、予復習が多いと予測されます。専門と教養を比べると、③ディスカッションなどのAL手法が教養で多く用いられています。⑦授業外で教科書・文献を読ませるのは専門が活発で、これは知識付与型（講義中心）科目のためかもしれません。



科目区別：授業手法の活用状況



クラス規模別：授業手法の活用状況



クラス規模ごとの各設問の平均値を見ると、授業中は、クラス規模が小さいほど、様々な授業工夫がなされていることがわかります。①質疑応答、③ディスカッションなど双方向性のAL手法で差が大きく、⑦～⑨の授業外の課題では差が少ない傾向にあります。

これらの実態から見えてくる課題は、第1に知識付与型または講義中心の科目で学修効果を高める手法、第2に中・大規模クラスでできる授業工夫と言えます。

アクティブ・ラーニング手法を コンスタントに活用すると学修効果 があがりそう

様々な授業工夫は、学修効果を高めるためにあります。では、どのような授業手法が学生の学びの定着や深化に効果的なのでしょう。期末に実施される学生の授業アンケートには、授業の理解度、該当領域の知識・能力の向上など学修効果を学生が自己評価する設問があります。それらの項目と本調査の授業工夫との相関を測ったところ、教養科目では①授業中の意見・質問、③ディスカッション、④発表で相関係数0.4点台の中程度相関が確認できました。専門科目では③ディスカッション、⑤授業中

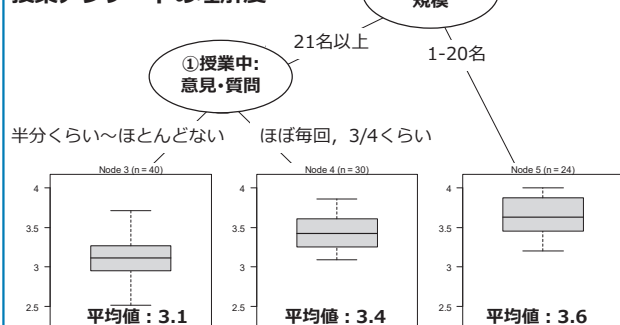
の小テストで0.2点台の弱い相関が確認できました。

さらに教養科目を対象に、データマイニング手法である決定木分析を試みたところ、下図（左）のように、クラス規模が1～20名では授業手法と理解度の間に関連はみられませんでした。クラス規模が小さい授業では比較的多くの授業工夫がなされていて学生の評価も高いためと推測されます。一方、21名以上のクラスでは、授業中に学生に意見を求める頻度が3/4を超えると理解度が高まるという結果でした。つまり、授業工夫は、毎回の授業でコンスタントに実施しないと効果が出ないのかもしれない。

下図（右）はH29年4月に新入生全員を対象に実施した就業力アセスメント結果を、高校時代にグループワークや発表などAL手法の授業を頻繁に受けた層と受けなかった層に分けて表したものです。思考力を表すリテラシー領域はほとんど差がありませんが、コンピテンシー領域では明らかな差がみられます。

授業手法と学修効果の因果関係はまだ不明確な面がありますが、AL手法をコンスタントに活用することは学士力、就業力の両面で効果がありそうです。

注）本調査の詳細な報告書をご覧になりたい場合は、高大接続・全学教育推進センターまでお問い合わせ下さい。

決定木分析：教養
授業アンケートの理解度

高校時代の授業経験別アセスメント結果

